

やんばるの森の再生

3人の「新しい」生態学的 “プロジェクトX”

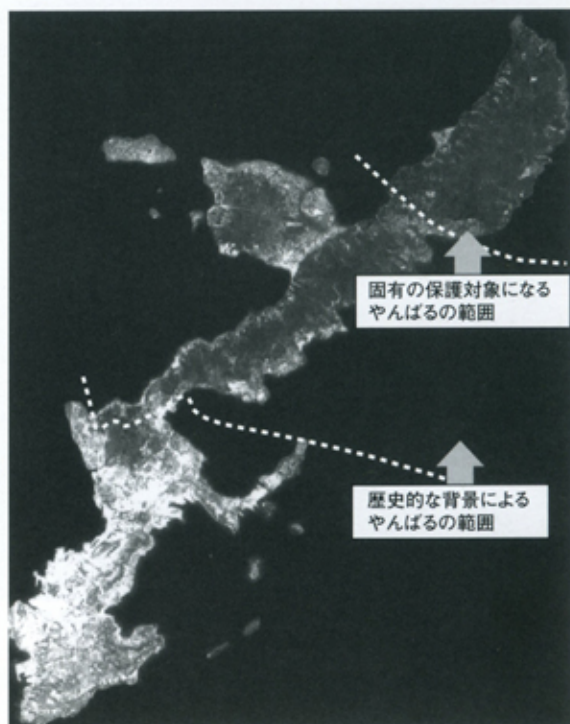
矢野智徳さん(NPO法人「杜の会」)

島袋太さん(農業)

上里幸秀さん(沖縄県農林水産部北部農林水産振興センター)

固有種も多く「東洋のガラパゴス」とまで呼ばれているやんばるの森。

その「やんばるの森が危ない! 傷んでいる。病んでいる」とそれぞれの立場から再生に取り組んでいる3人がいる。きっかけをつくり再生を実践した生態的造園家、やんばるの森を生活の糧としている地元農人、そして、いまの社会システムではなかなか理解されない再生法を「公共事業」として成し遂げようとする行政の人である。



やんばる(山原)とは「山々が連なり、鬱蒼とした森が広がる地域」という意味を持ち、具体的には沖縄島北部を示す言葉。しだいに「やんばる」と呼べる範囲が狭まり、現在では名護市以北がやんばる地域の概念となっている

やんばるの森が「呼吸不全」を 起こしている

山は生きている。森も、人間や他の生物と同様に深い傷を負ったり、呼吸を止められれば、体調の不調は起こる。この当たり前のことが、今の世の中の考え方では、なかなか理解されない。植物の学者も、固有植物の衰弱は理解しても、土壌や、ましてや森の衰弱、それが海まで含めた周辺環境の変化の影響である、という全体性になかなか目を向けられない。

「やんばるの森が危ない! 傷んでいる。病んでいる」

この森の「呼吸不全」に気がついて、治療でいえば、外科医療や薬物学による即物的な対症療法でなく、いわば氣の流れを整え生物の持つ自然治癒力を高める「全体性(ホリスティック)の医学」の東洋療法的な診断と治療で、やんばるの森の再生に動き始めた3人に会った。

ひとは、ここやんばるの森に住み、地元国頭村で農業を営む島袋太さん。海で魚を

採って、畑を耕し、日常的に自給自足のような生活をしているところから、島袋さんをよく知るまわりの人からは「縄文人」と呼ばれている人だ。

そして、沖縄県農林水産部北部農林水産振興センター森林整備保全課主任技師という行政の立場から、「森を何とかしなければ」と関わる上里幸秀さん。

もうひとは、東京のNPO法人「杜の会」の矢野智徳さん。BIO-Cityでは矢野さんとはNo.18(「自然を見る目・鳳来山の水と植物の物語」参照)で会っていて、その生態的な造園土木工法の哲学と考え方は、ある程度理解していた。

やんばるの森の再生という 「公共事業」

やんばるの森全体の「呼吸不全」を見る目。見える目。今日までの教育や現在の専門化された学問体系からこのことを理解するのは、実は大変難しい。

まず、上里さんのお話から、紹介していこう。

上里さんも、なぜやんばるの森が傷んでいるのかということを理解するのに、かなりの時間を要した。「僕も3年くらいかかっているんです。最近やっと腑に落ちてるという感じです」という。そして、やんばるの森の再生とは、公共事業となる。

「公共工事の場合は、現場で責任者がいて、そのほうが設計通りにやるという、だれがやっても同じ工事方法になるわけなんです。責任は行政がとるわけですから。しかし、我々はまだ、その設計図をつくることまでたどりつけなくて、矢野さんにお任せしても、図面がない、本人がその場を見てそれから決めていくというやり方になるので、我々には根拠も何もわからないのです。仮にもしこれが崩れた場合に、責任はどこが負うんだということになってくるわけです」。

「土でも植物でも個々で違いがありますが、公共工事はすべて同じ条件という前提で設計しているわけです。違うのは基礎面とか傾斜とか角度とかだけで、あとはすべて同じようにやるのですが、矢野さんの場合はそこに時間の軸と土壌の質とか植物の表情